

早稲田大学講義録『高等国民教育』に関する一考察

—「読者倶楽部」における学習者の声を手がかりに—

関 本 仁

はじめに

本稿では戦前の早稲田大学において展開された講義録（通信教育）群のなかでも、明治41年度から43年度にかけて刊行された『高等国民教育』について、実際に学習を行っていた受講者の視点を軸に考察するものである。本稿に関する先行研究としては、『早稲田大学百年史』、田中征男『大学拡張運動の歴史的研究—明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』、中西敬二郎「早稲田大学出版部小史」、早稲田大学大学史資料センター編『高田早苗の総合的研究』などが挙げられる。『高等国民教育』は3年間に行われたのみであり資料が乏しいためか、先行研究の中で最も多く言及がなされている『早稲田大学百年史』においても、『高等国民教育』が早稲田大学創立者である大隈重信の理念を具現化したものであること、大きな需要を生まなかった為に短命に終わったこと等が記されている⁽¹⁾に止まっており、そこで行われた学習の内容についても詳しく立ち入ることはしていない。また、「大学史」という性質上、学則などをはじめとする早稲田大学の制度史としての側面が強く、大学側の視点でのみ記されている。前述の『大学拡張運動の歴史的研究—明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』では「早稲田学報」誌上で「学外叢議」という、講義録の読者投稿欄の存続を巡る応酬について触れている⁽²⁾。しかし、ここにおいても講義録の受講者がいかなる経緯で、どのような学習を望み、それを後にいかに生かそうとしたかについてうかがい知ることは難しい。『高等国民教育』はその開設されていた3年間で毎年三千人前後の受講者を受け入れており、他の『政治経済科講義』、『法律科講義』、『文学科講義』などといった高等教育・専門教育レベルの各講義録のそれぞれの受講者数と数の上では遜色が無く⁽³⁾、『高等国民教育』の刊行が停止されたことに関しては他の要因が可能性として残されているように思われる。また、早稲田大学総長であった大隈重信の理念に加え、『高等国民教育』が刊行されていた当時の早稲田大学学長であり、東京専門学校時の講義録の刊行開始から関わりを持っていた高田早苗の発言等を踏まえておく必要があるのではないか。事実、『高等国民教育』刊行当時、高田は講演等で『高等国民教育』などについて幾度か言及をしており、高田の発言等を分析していくことによって、『高等国民教育』の目指した目的や理念への理解をより深めることができるのではないだろうか。

そこで本稿では、主として1908（明治41）年から1910（明治43）年とその前後における『早稲田学報』等の雑誌、『高等国民教育』に関する冊子等を用いて、先ず第1節で『高等国民教育』の早稲

田大学講義録の中における位置づけを、他の私立学校の講義録群との違いなども踏まえつつ明らかにしていく。第2節では『高等国民教育』を早稲田大学講義録全体の中での位置づけを確認し、その内容についての確認を行う。第3節ではさらに先述のように高田の発言等を踏まえ、『高等国民教育』を受講する者たちに期待したものは何であったのか、第4節では実際を受講者たちは『高等国民教育』をどのように受け止め、どのような状況で学んでいったのかということについて、編集部がその投稿を採用した意図も勘案しておかなければならないという条件がつくが、制度史としての側面ではなく「読者倶楽部」という、これまであまり焦点が当てられてこなかった、受講者の「生」の声を参考に、彼ら受講者自身の学習に対する意識は如何なるものであったかを明らかにすることを目的とする。この一考察が筆者の今後構想している〈戦前における早稲田大学講義録についての総合的研究〉の一端を明らかにすることができると考えている。

1. 東京専門学校講義録の成立

東京専門学校自身が組織的に講義録による「校外生」制度を発足させる以前、埼玉県北葛飾郡宝珠花村（現春日部市庄和地区）の横田敬太という人物が高田早苗と地方講演で知り合い、高田の協力を得ることによって1886（明治19）年発足させた『政学講義会』⁽⁴⁾があった。これは高田が「学校の同僚とも相談の上、学校の名を貸して其人（横田：引用者注）の勝手に経営させる事にし、『政学講義』と『法学講義』を先づ始めさせた⁽⁵⁾」ことによる。これをもって高田は「日本で校外生を募つて講義録を発行すると云ふことは、此前の講習会の席に於ても陳べた通りに先づ此早稲田大学が初めてである。もう少し適切に云へば寧ろ私一己の工風に出たものである。⁽⁶⁾」「之れは我日本に於ては早稲田大学で初めて考へだしたことであつて、二十年前に此事を思付きまして今日まで継続して此筆の上の大学教育の普及と云ふことは終始努めて居り、そして其が益々発達をして居る訳である⁽⁷⁾」と後に回想をしている。ただし、これより以前から、たとえば1885（明治18）年に英吉利法律学校がその開校当初において講義録発行を開始させており、1887（明治20）年1月から専修学校が法律学および経済学の講義筆記の発行を行っている。さらに同年9月には明治法律学校が講法会から講義録を発行、これは後に校外生制度として発展し、法学科と商学科の2科を置いている。横田敬太の事業失敗により、活動停止となった政学講義会は高田早苗、東京専門学校幹事・田原栄により「東京専門学校出版局」と組織再編され、講義録発行の事業を継続させていく。それまでの横田による個人経営としての政学講義会から、田原を発行人、横田を印刷人とする東京専門学校出版局の事業として吸収されるというように講義録はその体裁を変化させていった。1891（明治24）年2月に東京専門学校が全面的に直接経営に乗り出すまでの3年余りの期間は、実質的には東京専門学校自身の運営に属する状態ではあったが、形式的には学外の出版機関である「東京専門学校出版局」の経営に属していた。「政学講義会」経営時からの横田の負債が出版局の財政を圧迫していたようである。しかし、講義録出版に対する熱意から出版の存続を試みようとした結果、学校直営という形態を採ったようである。

東京専門学校が学校直営として講義録を発行することになるのは1887（明治20）年10月の事であ

るため、上記の3校は東京専門学校より先んじて講義録を発行し始めたことになる。講義録発行開始初年においては『政学部講義』・『法学部講義』と題された二つの講義録があり、各々60ページ、一部金八銭としていた⁽⁸⁾。これらはそれぞれ東京専門学校の配当表から、代数学、体操、卒業論文の三科目を省いたものとはほぼ等しく、担当教員も同一であった。翌年には『行政科講義』が加わり、1895（明治28）年には『文学科講義』の刊行が開始された。なお、哲学館は1888（明治21）年から『哲学館講義録』を発行開始し、哲学館通学者を「館内生」、講義録購読者を「館外生⁽⁹⁾」として通信教育の制度を整備拡充をしている一方、和仏法律学校では1890（明治23）年1月から校外生制度を行っている。また、東京大学は明治10年代では自然発生的な演説活動がみられるなか、1887（明治20）年2月から、理、医、法、文、工の五分科大学の、帝国大学教授有志による大学通俗講演会が設立されている。慶應義塾では1908（明治41）年から夏期休暇を利用して地方巡回講演を開始している。このように、東京大学や慶應義塾などでは「講義録」という形態を用いない大学開放の方法を展開していた。

2. 『高等国民教育』の創刊

1908（明治41）年から早稲田大学では『高等国民教育』なる一年制の講義録が開始されている。これはその扱われている内容において、他の講義録とは異質なものであったといえる。それは発行の趣旨には、「所謂リベラル、エヂュケーション、中学程度以上の国民教育に資せんとする⁽¹⁰⁾」としており、他の講義録で行われているような政治、法律、商、文学、哲学といった専門教育ではなく、「政治思想と文学趣味」に重きは置かれているものの、一般教養養成を目的とした講義録であった。一般教養を主眼としているという点で「高等予科」的な性格を有しており、事実、『高等国民教育』より数年前から開始された『商業講義』『中学講義⁽¹¹⁾』という中等教育レベルの講義録を修了した後、『高等国民教育』の卒業試験に合格すれば、通学課程の専門部一年次へ無試験入学することができた⁽¹²⁾。しかし、「所謂高等学校なるものも、大学の予備教育即ち専門教育の準備にのみ忙はしくして、これ亦吾人が庶幾する高等国民教育とは為って居ない⁽¹³⁾」として専門教育に対する準備教育としての位置づけにとどまることなく、「現世紀の人物、立憲的たると同時に世界的たる人物、活きて働ける学者、實際間に合ふ事務家となる素地を与へんと欲するにある⁽¹⁴⁾」としていた。

『高等国民教育』はどのような内容であったのか。月謝は60銭、月二回刊行、一年制というこの講義録は初年度において受講者数は3615名、その内卒業試験を合格した者は158名であった⁽¹⁵⁾。卒業試験は必ず受けなければならないものではなく、年間を通して受講した者は修了証書を受けることが出来た。初年度に続く明治42年度では、この年から開始された「校外教育部⁽¹⁶⁾」との連動を意図し、「第十八条 本大学発行の「高等国民教育」を特に部友の研究及通信の機関とし特徴を以て部友に配布す」というような文言が「校外教育部規則」の中にみられた。明治43年度ではさらに「今年度の新学期よりは、特に政治、実業、文芸、理学、工業、其他學術の新しき問題に係る名流大家の所説を『課外講義』と題し別冊として毎月一回づつ講義録以外に発行し本講義録の読者に限り無代価にて配

布する筈⁽¹⁷⁾」とし、「法律学」といった枠組みではなく、たとえば、「近松対シェークスピア対イブセン」（坪内雄蔵）、「人民の自修機関としての図書館」（和田萬吉）といったトピックが掲げられ数回にわたり掲載された。この『課外講義』は『早稲田講演』というタイトルとして刊行された。このように3年間という期間の中でも毎年大きくカリキュラムが変わっていった事を見ても、手探りの状態で方向性を見いだしていこうとしていた編輯者の意図がうかがえる。『高等国民教育』は明治43年度をもって廃刊となっているが、「早稲田学報」や「早稲田講演」を参照しても廃刊についての記述は見られず、「早稲田講演」では雑誌の評判がよかったために「従来本誌は単に我が早稲田大学出版部より発行し来れる講義録『高等国民教育』の読者并に他の希望者諸君に配附するに過ぎなかつたのであるが、次号からは全く独立した一月刊雑誌となり広く世間の市場にも売り出すこととなつた⁽¹⁸⁾」事が触れているのみである。しかし、この次号からの刷新によって、それまで文化系の内容ばかりであった「早稲田講演」のなかに「地質学と進化論」、「空中飛行機の発明と我国の工業」などの講演が掲載されているのは、それまでの『高等国民教育』を通年を通した学習や、修了・卒業といった制度はなくなってしまったが、学習内容的には引き継ぐ形になっていたのではないだろうか。

3. 『高等国民教育』と高田早苗

『高等国民教育』発行当時早稲田大学総長であった大隈重信はその前後において『国民読本』の発行（1910（明治43）年）とそれに呼応する形で『国民教育青年講習録』（1911（明治44）年）を刊行し、さらに『高等国民教育』が終了した直後の1911（明治44）年には「一般民衆に世界的の新智識を供給し、専門的智識を極めて通俗に普及せしめ、兼ねて社会万般の現象に対して知識ある批判を与えんがために、政治、経済、文学、教育、美術、実業、各班に渉れる豊富なる内容を有せる雑誌『新日本』を書肆富山房より発刊⁽¹⁹⁾」している。しかし、大隈の言葉からは「国民教育」などはみられるが、「高等国民」という言葉は確認できない。一方、当時早稲田大学学長を務めていた高田早苗は以下のような言及をしている。「（早稲田大学では：引用者注）小学の講義録と云ふものはないけれども中学および実業中学と云ふが如き者に比較すべき中学講義商業講義、其上に高等普通教育、リベラル、エデュケーション（liberal education）と云ふのに当る高等国民教育而して各専門教育の講義即政治経済科法律科学科と云ふようなものがある。さう云ふ次第で兎にも角にも多くの年所を経過した結果として丁度無形の学校が茲に成り立つて居ると云ふことになった。中学校、実業学校、高等学校、大学校若しくは専門学校と云ふものが建物は無いが、紙の上でちゃんと出来上がると云ふ迄に発達した訳である。⁽²⁰⁾」「中学、商業の中等教育より高等国民教育を経て、政治、経済、法律、文学等の各専門教育に至る迄、悉く通信教育によって施す、組織的教育機関となせり。⁽²¹⁾」ここにみられるように、早稲田大学において展開された講義録は通学という形態を用いずとも学習が行えるようにこれまで整備をしてきたこと、当時の高等学校に対応する形で『高等国民教育』がつくられたことがわかる。ただ、「唯筆の上で教を受ける丈ではどうも靴を隔て、痒きを搔くと云ふ怨みがある。筆の上で一旦教へられたことを更に口ずから概括して講釈をして貰うと云ふことになると今まで自分の目を用ひて学んだ

ことを更に耳によつて之を脳裡に復活すると云ふことが出来て、彼と是と相俟つて初めて消化した知識になる。斯う云ふことが大いにあるやうに思はれます。⁽²²⁾」と指摘し、通信教育による学習にとどまることなく、校外教育部というセクションを設置している。また、「唯の日本国民でなくして模範的の日本国民即ち高等国民であつて他のすべての国民の上に立ち、之れを指導し之れが模範となるだけの人間に諸君を仕上げなければならぬ⁽²³⁾」としていることから分かるように、早稲田大学で学ぶ者たちに対して、これからの日本を担っていく指導的立場としての「高等国民」となることを高田は期待していたのである。加えて、『高等国民教育』発行開始当初様々な新聞雑誌等に取り上げられていたようだが、なかでも雑誌「財界」においては当時の評価として、「営利を度外視して現世文化の発展に力むるに於てふつうの書肆と異なるかは、世間何人も認むるところであろうが今般創刊されたる高等国民教育の如きは明に同出版部の特色を証明するものであつて、又同出版部を主裁せる高田博士の教育策の一発現と見ることが出来る⁽²⁴⁾」として紹介がなされており、これも高田の影響が色濃く出ていることを示す一例といえるのではないだろうか。

4. 『高等国民教育』に対する学習者の声

『高等国民教育』で特に注目したいのが、読者投稿によるページ「読者倶楽部」である。早稲田大学講義録における職業別の統計などは残っておらず、受講者各々の自己紹介のいくつかの中から窺い知るのみであるが、それによれば、准教員、教員、実業家、兵士、農夫、官吏（林業）、鉄道業、日露戦役の廃兵、商店の見習小僧など多種多様であつた。受講者たちの学習に対する姿は彼らの投稿からわずかではあるがそのいくつかを知ることができる。たとえば、「草廬を出づれば即ち病むの悲運に遭遇すること、前後すでに五回。雄飛発展すべく資力と体質と修養との不足を悟れるや久し。而も尚ほ野心と遊心と勃々禁じ能はざるもの旧来依然たり、我何の故なるを知らず。今春本講義録を購読すべく禁煙を断行せし時も病臥中なりき。爾来なほ快癒に至らざるに枕頭既に六巻を飾る、不堪感謝⁽²⁵⁾」また「僕は日露戦役の廃兵である。極めて生産的の人間ではあるが、さう価値を下げられても困る。数百金の年金と恩給は以て父母を養ひ、妻子を養ひ、加之毎月本誌其他二三種類の新刊物を読む事が出来、従つて多年軍隊で固めた没常識頭脳も、幸に本誌の模範的国民教育の恩恵に依り開発する事が出来る⁽²⁶⁾」、というように病気もしくは体が不自由な身であってもなお学習に対する意欲を持ち続けるひとがいたことが確認できる。「降り続く霖雨に身も心もめいらんとする三日の朝、奮つて六時半に起床して朝餉をすまし、官署へ赴かんとする折しも、お馴染の郵便配達夫は来たりて、待ちに待たれし「高等国民教育」はわが手に落ちた。登署後僅かの時間を得て巻頭より一瀉千里の勢を以て走り、早くも一番なつかしい雑録へきた⁽²⁷⁾」では、学習すること、他の学習者の「声」に耳を傾けることに対して待ち遠しさに満ちあふれていることが窺える。「諸兄、予は先年小学を卒業せしホヤク也。日々夜々役々として労働に服し、やつと其口を糊する貧人也。昨夏漸く本誌の愛読者となり、文明的新知識に接するを得たり。予は大に感謝す、本誌の丁寧親切なる講述と、労働の神聖なること、を。⁽²⁸⁾」というように、『高等国民教育』は本来中学卒業程度の学力を持つ者が受講対象で

あり、中学レベルの学習をする講義録としては『早稲田中学講義』『早稲田商学講義』が用意されていたが、小学校卒業後に『高等国民教育』を学ぶ、という者もいたようである。受講者の居住地も日本全国各地から奉天、全羅北道など東アジア地域に加え、アメリカのオレゴンなども含まれていたようである。投稿された内容として興味深いものは大きく分けて2つあり、1つは講義録に対する感想・意見であった。たとえば、「『高等国民教育』実に予想外の出来栄にて、講義の嶄新なると講習に便なると誠に嬉しく候。此上願はしきは毎号講師方の写真を順次に掲出せられたきことに候。⁽²⁹⁾」、「小生は先年中学を卒業し、其後上京して一と勉強致したき考で居りましたが、学費の都合でそれも出来ず、目下片田舎で小学生を相手にしながら、過般來本誌の講習を受けて居る一人です。中学卒業者に対して此講義録は実に金科玉条と信じて居りますにつけて、私の切に希望する所は、一年制度を革めて少くとも二三年は継続して貰いたいことです。⁽³⁰⁾」 「本誌を購読するに従つて、欲望が募つてきた。せめては本誌を二年若くは三年制に変更を願ひ、業務の傍ら充分研究いたしたい。是れに付いては他読者の希望もありと思ふ、敢て編者の一考を煩はす。」「夏期講習会は明年度より八月中に行はれてはいかゞでしょう。七月は実業家の最繁忙の際、目まひがするほどの時期です。⁽³¹⁾」 「本講義録を以て専門的のものとせず、何処までも通俗的にし、読者自身啓発の資料につき指導者たる御趣旨を以て、諸先生が教示の榮を賜はらむ事を希望仕候。⁽³²⁾」 「第一号と第二号とに載せられた総長及学長の御面影は、生が机上高く掲げてある。これを見ると早稲田に居る様な気持がする。所が早稲田の三柱のうちの坪内、天野両博士の御写真が無いので、何だか物足りない。他の諸先生の御肖像も是非巻末迄には載せて貰ひたいが右両博士の御写真だけは総長、学長のそれと同形で出して貰ひたい。是非々々、鶴首々々。⁽³³⁾」 などというものがあつた。様々な意見を取り入れたことは、年度が替わるごとにカリキュラムが大きく変わっていったことに繋がっているのかもしれない。2つ目は受講者間の文章のやりとりであり、「本講義録に「読者倶楽部」欄の新設せられたるは余輩の喜びに堪へざる所なれど、而も紙数に制限あれば読者全般の感想発表の具となり得ざるべきや最も明か也。茲に於てか余輩は校外生を中心とせる雑誌刊行の挙を企画したく思ふ。諸君以て如何と為す。⁽³⁴⁾」との提案の後、「滔々として羊頭狗肉のゴマカシもの多き通信教授界に、本誌の如き真面目なる良講義録ありとは、我ら校外生たる者肩幅の広き感あり。講師及編者に多謝の意を表す。第九号本欄における未見の友、芝喜楽居士の発起にかゝる機関雑誌発行、大々の賛成也。善は急げ、直ちに実行如何。雑誌名は「早稲田の園」、会名は早稲田学友会、頁数約三十、会費五銭、我ら校外生を通常会委員とし、講師并に編輯員諸君を賛助員に推さば妙案と存ず。⁽³⁵⁾」と受ける者があつてさらにこの提案について「機関雑誌発行は大に希望する所、」という者があれば、「機関雑誌発行は大反対、そんな生意気な真似をするよりも、着実に勉強せねばならぬ我々だ。」というように賛否両論が示されていたが⁽³⁶⁾、独学で学ぶ受講者たちが少しでも他の受講者たちとのつながりを求めようとしていたことをここに窺い知ることができる。それは、「僕がもし校内生であつたなら、日々相会して種々面白き物語りに趣味を覚えるであらうに校外生の悲しさ斯かることは到底不可能である。されば会員相互に慰安の一方法として、通信交際を始めようではないか。其れには其地の名所旧蹟、其他珍らしき事物を写した絵葉書交換を以て

するのが最もよいと思ふ。同好の諸兄奮つて賛成あれ。⁽³⁷⁾」というような提案をする者もいたことにもあらわれている。機関誌に関しては「自今の如く校外生諸君と本欄に於て友誼を交換しつゝ、在るの日は、此上雑誌発行の必要もないけれども、一度講義終了の暁、再び諸君と相見ることの出来ないのは甚だ遺憾に思うから、機関誌の発刊により永久に講師諸先生の訓示に加ふるに、相変わらず誌友諸君の親密なる交誼を継続したいといふのが我が輩の主意である。⁽³⁸⁾」というように一旦受講を終えた後のつながりの場としての期待をしている者がいた。「雑誌の刊行の挙なくば、来る四月以後は最早我親愛なる誌友諸君と友情を暖むる能はざるを如何せんや。加之、本誌雑録欄以下の如きは吾人講習生のみ独占すべきものにあらずして、広く社会の多数人に推薦すべき性質のものなり。願わくは編者各位に於て、本誌講習生の為雑誌刊行の計画あらん事を切望して止まざるなり。⁽³⁹⁾」このような機関誌発刊の提案を受けたことが、受講者の交流の場としての雑誌ではないが、結果として『早稲田講演』という雑誌発刊に繋がっていたのかもしれない。上のやりとりとは別に、「当須坂町には御校校外生各科を併せて約二十名有り之候が、諸氏の希望により知識交換を目的として「早稲田学友会」と稱する者を設けんとす。基本部を出版部にて願はれまじく候や。⁽⁴⁰⁾」このように計画されていたものが、「僕等近傍の校外生相寄つて一の集會を催したり。會名は早稲田同攻會須坂支部、会場は小学校女子部、會員は文科一名、法科一名、高等国民科一名、商科三名、中学科八名計十四名、而して會を重ぬる既に五回、次回は二月十四日なり。御同志の校外生諸君、何科たるを問はず御入會を望む。⁽⁴¹⁾」というように、実際に會が発足した後の報告がなされている。その一方では、「山形県校外生諸氏に告ぐ、本講義に依つて得たる知識を益發揮して、賢明なる諸兄と共に早稲田の學風を我同輩に知らしめ、どこまでも高等国民としての転職を普及せしむる趣意にて、山形県人を以て一の會を設立し、早稲田を本部として新年早々活動したし。熱心なる諸兄賛同の上、生宛に御一報を乞ふ。⁽⁴²⁾」というように長野からの呼びかけも「読者俱樂部」には見受けられた。このように地域で自然発生的に学習者集団を形成していく者たちもあつたようである。明治42年度『国民高等教育』講義録は早稲田大学にも残されていないために詳細は不明だが、学科表を見る限り投書欄は存続していたようである。これが明治43年度になると、投書欄は『早稲田講演』へと移り、「読者文壇」と名称も変わり、内容も懸賞短文となったために、以前のような受講者同士の文章の遣り取りは見られなくなっている。

おわりに

第3節で見たように、高田早苗は講義録を学ぶ受講者たちに対して、これからの日本を担っていく指導的立場としての「高等国民」となることを期待していたのである。この意図を最も典型的に示した講義録といえるのではないだろうか。それは明治41年度の最終号において、ある受講者の今後の自学自習についての決意が「世界的模範国民たらむこと」という言葉を伴って掲載されている⁽⁴³⁾のは象徴的であるといえる。また、第4節で見たように、学習をする機会をさまざまな理由で阻まれていた人々が大きな熱意を持って学習に取り組んでいた。一旦は講義録が修了しても、学習者がなおもたゆまぬ向学心を持ち続けていく人々が現れたことは『高等国民教育』開始されたときに掲げら

れ、高田早苗も述べていた「所謂リベラル、エデュケーション」の成果といえるのではないだろうか。明治期の終盤という時代において、受講者の要望を受けつつ、毎年度試行錯誤を繰り返しながらも、様々な地域、境遇の人々に私立の「大学⁽⁴⁴⁾」が高等教育レベルの一般教養を提供することを試みたことには大きな意味があったということが出来るだろう。

高田早苗における＜講義録ならびに教育に対する思想的背景＞はどのようなものであったのか、また、上に挙げたような弛まぬ向学心を持った人たちが『高等国民教育』を学んだことが、その後の彼らの人生にどのような影響をもたらしたのかについて探っていくことを今後の課題とする。

注(1) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第二巻』早稲田大学出版部 1981年、486-487ページ。

(2) 田中征男『大学拡張運動の歴史的研究—明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』野間教育研究所紀要 第30集 講談社 1978年、159ページ。

(3)

年度 (明治)	政治経済科	法律科	文学科	商業科	中学科	高等国民 教育科
41	2,834	3,194	2,448	8,626	12,817	3,615
42	3,034	3,537	2,354	7,951	12,078	3,836
43	2,978	3,590	2,269	5,449	11,528	2,954

「校外生年別表」＜早稲田学報＞188号 1910年、10月 28ページより作成。

(4) これは当時あった普及舎の「通信講学会」(山縣悌三郎立案のもと、1885(明治18)年12月5日付「教育時論」第23号紙上に「通信講学会興る」と題してその「趣意書」および「規則」の前文が掲載され、この事業の開始を大きく報じている)をヒントにして発足したものの。この「通信講学会」には高田も依頼を受けている。「私は何でもミルの『代議政体論』の翻訳と、『貨幣論』か何かを載せたのであつた(高田早苗述 薄田定敬編『半峰昔ばなし』192ページ)。」だが、比較的幅広い学問分野をカバーしつつ、基本的に理学思想、理学教育の発達への貢献という理念に貫かれていた通信講学会に対し、政学講義会は国会の開設や官吏の登用試験などを視野に入れた「政学研究」が中心であった。

(5) 高田早苗述 薄田定敬編『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部 1927年、193ページ。

(6) 高田早苗「大学教育の普及に就て」＜早稲田学報＞175号 1909年9月、2ページ

(7) 高田早苗「大学普及の要因」＜早稲田学報＞185号 1910年7月、2-3ページ。

(8) 第七条 校外生ニシテ其卒業証書ヲ受ケント欲スルモノハ試験ノ上之レヲ与フ可シ。

第八条 校外生タラント欲スルモノハ入学金五拾銭ヲ納ム可シ。

第九条 校外生ハ毎月講義録印刷ノ月費トシテ老学部三拾六銭ヲ納ム可シ。

但府外ハ郵税金五銭ヲ要ス。

「資料21 講義録受持講師および科目記事」早稲田大学大学史編集所編『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学出版部 1978年、105ページ。

(9) 1888(明治21)年7月より館外生、館内生から館外員、館内員へと呼称が改められている。

(10) 『明治41年度 高等国民教育』第1号 早稲田大学出版部 1908年4月12日、1ページ。

(11) 『商業講義』は1905(明治38)年から、『中学講義』は1906(明治39)年から開始されている。

(12) 専門部2年次への編入は試験の後、入学が認められるということになった。

(13) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第1号1-2ページ。

(14) 同前3ページ。

(15) 受講者数は前掲「校外生年表」より。卒業試験合格者は『明治41年度 高等国民教育』第24号 雑報 1909

年3月27日 3-5ページの「卒業試験の成績及び氏名」より筆者がカウントした。

- (16) 従来、巡回講話など基本的に夏季に限って行なわれていたものに対して、一年を通して学習活動を行なっていくとする部局。

本大学は各地支部又は其他有志の開設に係る講習会に講師を派遣し、政治・経済・法律・文学・商業・理工諸科に亘る巡回教育を為す。（早稲田大学校外教育部規則第四条）

当分の内春期自四月一日至同十日夏期自七月二十一日至九月十日秋期自十月十五日至同二十五日冬期自十二月二十一日至一月十日を以て開会の期とす。

但し、協議の上、会期以外便宜開設することを得。（同規則第五条）

一回の会期は五日間乃至十日間とす。（同規則第六条）

聴講修了者には校外教育部講習会修了証を授与し、校外教育部部友として永く本大学との関係を保たしむ。（同規則第十六条）

左記の者にして講習会修了証を有する時は、本大学専門部政治経済科若くは法律各科一年級に入学を許す。

本大学発行の『中学講義』若くは『商業講義』を修了し、更に『高等国民教育』を修了せる者。

本大学発行の『政治経済科、法律科、文学科各講義』の中孰れか其一を修了せる者。（同規則第十七条）

- (17) <早稲田学報> 181号 1910年3月, 10ページ。

この告知を受け、後にこのような概要を発表している。

再び校友諸君に告ぐ

前々号の誌上に於ける本大学出版部諸科講義録に関する報告中『高等国民教育』の『課外講義』に就ては更に報ずる所あるべく述べ置きたれば、左にこれを略説せむ。

右『課外講義』は特に本学期即ち今五月より開始の新学期に対する新企画にして、もともと応用的且つは實際的たらむことを主とする『高等国民教育』の更に更に応用的たらむとし實際的たらむとするものに外ならず。即ち名流大家に請うて社会に實際問題に対する新研究と新学説との発表を求め、これを毎月一冊子に纏めて広く世に紹介せむとするものなれば、『高等国民教育』の正課講義を併せ読まるゝことの可なるは勿論なれど、単に『課外講義』のみを購読せらるゝも亦大に新知識の修養に益する所あるべく、編纂の方法また殊別の購読にも適するやうの仕組みなれば、次に掲ぐる所の内容の一斑により購読希望の諸君は本大学出版部宛にて申込まるべし。尤も茲に掲ぐる所は単に予定され居るものゝ一部分に過ぎざれば、所掲以外各種の重要問題に就きそれぞれ名家に講義を依頼すべきは勿論也。

(中略)

校友諸君にして右『課外講義』のみの購読を望まるゝ向きへは、特に左の如き実費により需めに応ずるとのことなり（定価は十七銭宛なり）。

一冊（一ヶ月分）郵税其金拾貳銭

六冊（六ヶ月分）郵税其金六拾五銭

十二冊（一ヶ年分）郵税其金壹円貳拾銭

尚ほ右実費により購読希望の諸君は此際至急申込まるべく、発行後遅延して申込まるゝも或は欠本することあらむも測られず。

『高等国民教育』に関する詳細の規則書は出版部へ申し入れられれば直ちに進呈すべし。

『高等国民教育の新学期』<早稲田学報> 183号 1910年5月, 12-13ページ。

- (18) 「本誌の大発展に就て」<早稲田講演>第11号 1911年3月, 105ページ。

- (19) <早稲田学報> 194号 1911年4月, 18ページ。

- (20) 高田早苗「大学教育の普及に就て」<早稲田学報> 175号 1909年9月, 2ページ。

- (21) 高田早苗「有形無形の資本」『第3回 高等国民教育』第2号 雑録 1910年5月, 1ページ。

- (22) 前掲「大学普及の要因」3ページ。

- (23) 高田早苗「両面の教育」<早稲田学報> 183号 1910年5月, 2ページ。

- (24) <財界>第9巻 第2号 1908年5月, 52ページ。

- (25) 『明治41年度 高等国民教育』第8号 1908年7月27日、26ページ。
 (26) 『明治41年度 高等国民教育』第11号 1908年9月12日、24ページ。
 (27) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第8号 26ページ。
 (28) 『明治41年度 高等国民教育』第23号 1909年3月12日、8ページ。
 (29) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第8号 27ページ。
 (30) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第11号 24ページ。
 (31) 『明治41年度 高等国民教育』第9号 1908年8月12日、12ページ。
 (32) 『明治41年度 高等国民教育』第12号 1908年9月27日、21ページ。
 (33) 『明治41年度 高等国民教育』第16号 1908年11月27日、26ページ。
 (34) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第9号 12ページ。
 (35) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第12号 20ページ。
 (36) 『明治41年度 高等国民教育』第15号 1908年11月12日、19ページ。
 (37) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第12号 21ページ。
 (38) 『明治41年度 高等国民教育』第20号 1909年1月27日、21ページ。
 (39) 『明治41年度 高等国民教育』第22号 1909年2月27日、20ページ。
 (40) 前掲『明治41年度 高等国民教育』第8号、26ページ。
 (41) 『明治41年度 高等国民教育』第21号 1909年2月12日、25ページ。
 (42) 『明治41年度 高等国民教育』第17号 1908年12月12日、27ページ。
 (43) 「過ぐる一星霜、冊を重ねる廿四、茲に本号を以て師たり親友たる本誌と親愛たる諸君とに訣別するに至る。懇切なる本誌によつて得たる所甚大、深く感謝に堪へず。諸兄よ、希くは一年間の此薫陶によりて紳士の素養を得られたるに甘んぜず、日々自強息まず以て日進月化の大勢に先駆し、世界的模範国民たらむことを期せられよ」前掲『明治41年度 高等国民教育』第24号 雑報 1-2ページ。
 (44) 早稲田大学は1920年の大学令によって正式な大学となるため、この当時、正確には専門学校である。

参考文献

- 慶應義塾編 『慶應義塾百年史』中巻（前） 慶應義塾 1960年。
 法政大学編 『法政大学八十年史』法政大学 1961年。
 専修大学編 『専修大学百年史』専修大学出版局 1981年。
 東京大学百年史編集委員会編 『東京大学百年史』通史二 東京大学出版会 1985年。
 明治大学百年史編纂委員会編 『明治大学百年史』第3巻 通史編I 明治大学 1992年。
 東洋大学創立百年史編纂委員会 東洋大学井上円了記念学術センター編 『東洋大学百年史』通史編I 東洋大学 1993年。
 日本大学百年史編纂委員会編 『日本大学百年史』第一巻 日本大学 1997年。
 正田健一郎「早稲田大学教旨とその周辺」『高田早苗の総合的研究』年早稲田大学大学史資料センター 2002年。